

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

COCONUTS CLUB

May
2020 5

2020年の師崎案内





2020年の師崎案内

前号で特集した新師崎に続いて、
今回は羽豆岬を中心とした師崎中心部を歩いてみよう。
観光地としてクローズアップされるようになって今年で約百年。
多くの人を魅了してきた観光の町の現在を探る。



表紙写真／羽豆岬案内人の会、師崎まちづくり協議会のみなさん
扉写真／延命寺に展示されている「洛中洛外図屏風」のレプリカ

師崎観光小史

前号で紹介したように、旅館や飲食店が集まる新師崎は今年で50周年を迎えたわけだが、そもそも師崎はいつから観光を意識するようになったのか。それは、内海の内田佐七がバス会社を興し、南知多の宣伝を大々的に展開した大正時代である。佐七が知多バスの前身である知多自動車株式会社を創業したのは大正7年（1918）なので、およそ百年ということになる。

それ以前にも、知多四国の巡拝者や、明治時代半ばに羽豆岬南側の「待合浦」に開かれた海水浴場へ潮湯治に来る客などで、人の往来は多かった。しかし、本格的に人が訪れるようになったのは、陸上交通の利便性が向上してから。前号でも引用したパンフレットから、当時の師崎の概要を紹介する一文を抜粋してみよう。

潮の香も高い南海に突き出した知多半島は、島あり岬あり、又忘れさらぬ人なつこい人情とか言つたものによつて、温泉地が持つ情緒とはちがつた意味の、雰囲気にも包まれている。わけて半島南端師崎には史蹟あり名勝あり、潮に焦げた温顔の老漁夫、或は魚を運ぶ娘さんなど、日毎つましやかな浜の生活があり、又海岸線は仮に五分だめし一寸だ

めに試し斬りしてもその一つひとつは生きた構図を見せるユニークな景勝の地である。

〔昭和10年「南知多師崎御案内」師崎三業組合発行。一部現代仮名遣いに改めた〕

この中で「史蹟あり」と記されているのは、羽豆岬のことを指している。羽豆岬に鎮座する羽豆神社の祭神の建稲種命は、日本武尊が東征した際に旗頭を務めた神で、東征以前はこの地で玉姫命と仲睦まじく暮らしていたという伝説がある（本誌2017年9月号「岬の名を聞けば」参照）。また、ここには南北朝時代に千秋氏が築いたとされる羽豆城（羽豆崎城）があり、戦国時代に入城した千賀氏は、廃城後も師崎の領主としてこの地を治めながら、海岸防備の任に当たっていた。千賀家は明治時代まで師崎の有力者として地元の人に親しまれ、待合浦に海水浴場を整備したのも千賀氏の関係筋であったという。

歴史ロマンを掻き立てる史蹟だけでなく、特異な自然も早くからクローズアップされている。暖地性常緑樹林が「明神山」と呼ばれる岬の小山に密生しており、参道がウバメガシに覆われてトンネル状になっていることが特に注目されて、昭和9年（1934）には一帯が「羽豆神社の社叢」として国の天然記念物に指定されているのだ。国指定というお墨付きは、観光面で大きなア

ピールポイントになった。

その羽豆神社参道沿いには、昭和20年代に展望台が造られ、さらに神社本殿の先には昭和38年（1963）にレストハウス兼展望台も建設された（本誌2016年4月号「絶景礼賛」参照）。近年だと、平成22年（2010）にアイドルグループSKE48が発表した楽曲「羽豆岬」や、平成25年（2013）に三代目羽豆岬展望台が建設されたことも記憶に新しい。このほか、伝統行事、師崎漁港朝市、そして前号で紹介した海産物加工品や料理と実に多彩なアイテムが揃い、この百年の師崎は観光の話題が尽きることはなかった。

わが町をご案内します！

前号では、新師崎地区を切り口に食と観光について見てきたが、近年は食品観光産業に関わる事業者だけでなく、地域住民の中からも観光にアプローチする動きがある。地元在住の有志により組織されたボランティアガイドのグループ「羽豆岬案内人の会」だ。代表を務める山本嘉秀さんによると、メンバーは六、七十歳の15人。南知多の旅館に宿泊した観光客など年間約三百人を案内しており、神話の時代から現代まで網羅した詳しい歴史解説や、在住者ならではの知られざるスポッ

トの紹介で、好評を得ているという。

発足は平成23年（2011）。そもそも設立の少し前、南知多町が地域の実情に合った住民主体の地域づくりを進めるべく、町民の意見交換の場として地区ごとに開催した「住民会議」がきっかけ。師崎の地域づくりのキーワードのひとつはやはり観光で、会議でも「自分たちの力で羽豆岬をもっと積極的にPRしていこう」という話が持ち上がった。ただ、すべての住民が土地の歴史に精通しているわけではない。そこでまず、師崎小学校の社会科教員だった山下泉さんを講師に招き、勉強会を開催した。その講座の参加者を中心に結成されたのが、案内人の会である。南知多町では、尾州廻船内海船船主内田家の案内を主軸とした「みなみちた観光ボランティアガイド」が平成17年（2005）から活動しており、それに続くガイドグループとなった。

その活動はガイドにとどまらない。羽豆岬周辺の掃除を年に四回実施しており、掃除のあとは師崎の歴史・文化の勉強会を行っている。掃除には師崎中学校の生徒も参加し、世代間交流もしている。外に向けての発信だけでなく、師崎の未来を背負う若い世代にふるさとのよさを少しでも伝え、文化を後世に繋いでいきたいという思いを、メンバーが共有しているのである。

ここは知多半島の先端で師崎を訪れる人は誰でも景色のよいに驚かされます。

〔昭和24年刊の師崎小学校社会科副読本「師崎」より〕

「浅間山」より眺める師崎の全景。正面の小山が「明神山」で、山の左端が羽豆岬

「まちづくり」と観光と

案内人の会はガイドに特化したグループだが、師崎の地域活動を担う別の団体に「師崎まちづくり協議会」がある。案内人の会のコアメンバーや師崎区の役員なども参加しており、地域住民による観光振興はこの二つの会が両輪となって推進していると言っている。

まちづくり協議会は南知多町の各地区(内海・山海・豊浜・豊丘を含む)、大井、片名、師崎、篠島、日間賀島)に設置されている団体である。1990年代から国土交通省が推進していた地域振興策の全国的な広まりを受けて、平成15年(2003)に豊浜と日間賀島で発足したのが最初。以後、町内全域に広まり、師崎でも平成22年(2010)に設立された。その趣旨は、住民たちが自身が地域の課題を洗い出して解決に取り組むというもの。内容は、観光だけでなく生活環境の改善、防災防犯、交通安全や子供の見守り、地域に一体化をもたらす行事の開催など多岐にわたり、各地区がそれぞれのテーマに沿って地道な取り組みを続けている。そこへ、企画の内容に応じた行政が補助金によりサポートをする仕組みになっている。

観光を柱のひとつとする師崎のまち

してもらった。その屏風を眺めながら山本さんが語る師崎と延命寺と千賀氏の歴史話が非常に興味深い。それをそのまま記事に起こしたくなったが、今回は紙幅がないので、この話題は折を見て特集したいと思う。

延命寺は道幅の広い旧師崎街道(国道247号の旧道)沿いにあるが、この先は車の入れない路地を進む。次に訪れたのは豊泉寺。師崎にある五つの寺で唯一の無住寺で、知多四国や南知多三十三観音などの霊場の札所にもなっていないので、初めて耳にするという読者も多いだろう。しかしこは、知る人ぞ知る人気寺院。というのは、失くしたものをしたときや病気をしたときなどに願を掛けると、その願いが叶うと評判になっているのだ。

豊泉寺は少し奥まった場所にあり、境内は狭く、本堂も小さい。その本堂の中にながらみると、梁や壁に願い事を書いた紙がたくさん貼ってあり、驚いた。願いが叶った紙には御札を書いた札を重ね貼りしてあり、その数を見るとなかなか御利益があるようだ。なにか願い事がある人は、ぜひ行ってみたい。ただし分かりにくい場所にあるので、ガイドがない場合は頑張って自分で探さなくてははいけない。探検気分が路地に迷い込むのも、師崎の楽しみ方のひとつだ。

づくり協議会では、これまでに観光と文化に関係する事業として、山車の修復、案内マップの作製、1月の左義長まつりのサポート、子供たちと共同で左義長まつりの幟をモチーフにした「ミニ幟」の制作などを行ってきた。そして、昨年には新イベント「師崎まち灯り海ホテル」を立ち上げ、さらにこの三月には、師崎の名所十数か所に新しい案内板を設置した。

事業などという少し肩苦しく聞こえるが、これらの活動は何よりもまず「参加者自身が楽しむ」ことがベースになっている。案内人の会代表とまちづくり協議会会長を兼務する山本さんは「会合や親睦の集まりのなかで新しい提案が出ると、頭から否定するのではなく、じゃあみんなでやってみようか」という前向きな雰囲気になりやすい。海ホテルのイベントもそうやって始まりました」と話す。その意識はおそらく師崎に限らず南知多町全体に共通している。昨今、面白い動きが町内のあちこちで見られるのがその証だ。

ガイドとともに町歩き

羽豆岬案内人の会のボランティアガイドが案内してくれるのは羽豆岬だけではない。羽豆岬を散策した後は、

豊泉寺を出てさらに路地を進み、続いてやって来たのは「浜井戸」。町の真ん中に設けられた共同井戸で、大きな屋根の下に大きなコンクリート製の井戸筒が鎮座している。すでに役目は終わっているが、昭和36年(1961)に愛知用水が通水するまで長きにわたり暮らしを支えてきた、師崎の象徴的なスポットのひとつである。

切り絵作家の描くふるさと

最後に訪れたのは「きりえ工房お」。ここは切り絵作家の山崎修さんのアトリエ兼ギャラリーだ。山崎さんの名前は知らなくても、師崎を訪れたことのある人ならばまず間違いなくその作品を目にしているはず。左義長や大名行列のポスター、国道沿いに立つ活魚料理の朝日屋や神護寺の看板、師崎だけでなく南知多の観光パンフレットやマップなど、あちこちに山崎さんの手による切り絵が使われており、先日設置されたばかりの名所案内板にも大きくあしらわれている。それらの原稿が見られるのがここだ。

集落内の狭い通りに面した工房は、昭和4年(1929)築の味わい深い建物で、かつては弘法宿(知多四国の巡拝者向けの宿)や商人宿も営んでいたという。玄関横に工房があり、運が良

師崎の町の中へと導いてくれる。

前号でも触れたとおり、師崎は平地が非常に少なく、山と港に挟まれた土地に人家が密集している。町の中に二歩入りこむと、そこには「セコ道」と呼ばれる路地が迷路のように入り組んでおり、そのうち自分がどこにいるのかわからなくなりそう。漁村は大なり小なり同じような集落構造を持っているものだが、師崎の道の複雑さは、離島を除けば愛知県内でも屈指だろう。それでも、師崎を知り尽くしたボランティアガイドが一緒ならば、迷子になることはない。

山本さんの案内で、町の中に点在する名所のいくつかに連れて行ってもらった。最初に訪ねたのは延命寺。この寺については、千賀氏の菩提寺であることや、大坂の陣のときに豊臣方から助け出されこの地に連れてこられたと伝わる姫の墓、明治・大正期に活躍した小説家の小栗風葉や広津和郎らが逗留するなど、歴史の話題が多彩だ。また、江戸時代初期に描かれたという「洛中洛外図屏風」を有していることでも知られる。

屏風の実物は数年一度特別公開されるが、そのレプリカが他の寺宝や資料とともに本堂内に展示されており、ご住職の了解を得て山本さんに解説

誇れる自分たちの町のことを、もっと多くの人に知ってほしいから。



1 | 昨年開催された「師崎まち灯り海ホテル」
2 | 浜井戸。後方に見えるのが最近設置された案内板
3 | 豊泉寺本堂に貼られた願い事の紙
4 | 延命寺にある姫塚



きりえ工房 お

南知多町師崎字朝日町1
9:00~16:00、不定休(来訪前に電話連絡が望ましい)
問い合わせ/0569-63-1016

羽豆岬案内人の会

ガイドの予約・問い合わせは
南知多町観光協会(0569-62-3100)へ



美味しいもの、美しい風景、
そして土地の人々の人情が
観光客を惹きつける。

ければ制作風景が見られることも。奥のほうで展示スペースになっており、ここには大小さまざまな作品が並ぶ。看板やパンフレットもいいが、本物の力強さ、繊細さ、美しさは格別で、思わず唸ってしまう。

師崎の風景を数多く描いてきた山崎さんは生粋の師崎っ子で、師崎まちづくり協議会のメンバーでもある。山崎さんが切り絵を始めたのは、師崎郵便局に勤務していた昭和50年代初頭の30歳代前半の頃。版画家・切り絵作家の滝平二郎（1921〜2009）に魅了されて名古屋の教室で制作技法を学び、地元の風景、特に漁港をテーマにした作品制作に取り組むようになる。多くのコンクールでの入賞実績があるが、特筆したいのは、郵便局員時代の昭和56年（1981）より発行した師崎郵便局オリジナルのがきセット「南知多観光シリーズ」の制作や、常滑焼まつりの協賛はがきの制作など、作品を観光PRに活かす活動を早くから行っていたこと。地元を愛する思いを作品として表現し、山崎さんならではのやり方で師崎の魅力を発信していたのだ。

力強くあたたかく、師崎の人の人情まで写し取るその切り絵は、作家の個性であると同時に、今や師崎の個性のひとつにまでなっている。